慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ダブリンにおけるフィニアンの蜂起(1867年)
Sub Title	The Fenian rising in Dublin in 1867
Author	高神, 信一
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1992
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.84, No.4 (1992. 1) ,p.923(181)- 944(202)
JaLC DOI	10.14991/001.19920101-0181
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19920101-0181

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」84巻4号（1992年1月）

ダブリンにおけるフィニアンの蜂起(1867年)*

高　神　信　一

はじめに

数百年に及ぶイギリスの植民地支配の後，アイルランドでは1922年南部26州がイギリスからの独立を獲得したが，北部6州は依然としてイギリスの統治下にあり，IRAは今なお，武力闘争を展開している。このIRAの活動理念にすくなからぬ影響を与えたのが，1858年3月にダブリンで設立されたアイリッシュ・リパブリカン・ブラザーフッド（Irish Republican Brotherhood，以下IRBと略す）である。IRBは，イギリスからの独立を武力闘争により獲得することを目的とし，組織のメンバーはフィニアンと呼ばれた。1867年3月5日から6日の夜にかけて，フィニアンはアイルランド各地で蜂起を決行した。

従来のフィニアン研究史において，1867年の蜂起は詳細には分析されていない。L. O'Broin, *Fenian Fever: An Anglo-American Dilemma* (New York, 1971) は，アイルランドのState Paper Officeにある一次資料を使用した点において有益であるが，蜂起の経過を大雑把に描写したにすぎない。また，R.Kee, *The Green Flag: A History of Irish Nationalism* (London, 1972) は，蜂起後に開かれたフィニアン囚人に対する裁判記録を使用しているが，本稿が明らかにするようなダブリンの蜂起の複雑な様相を解明するにいたっていない。たとえフィニアンの蜂起は失敗に終わったとはいえ，従来考えられていた以上に蜂起は，綿密に仕組まれたものであった。以下，フィニアンが残した回想録，State Paper Officeの警察記録に依拠しながら，ダブリンの蜂起を可能なかぎり即事的に分析することにする。

(*) 本稿は，S. Takagami, 'The Dublin Fenians, 1858-79', Ph. D. thesis, Dublin University, 1990の第8章「1867年3月のダブリンの蜂起」，に依拠している。なお，論文の構成は，第1章「序」，第2章「ダブリンの組織の発展」，第3章「ダブリンの組織の構造」，第4章「誰がフィニアンだったのか」，第5章「蜂起の準備」，第6章「ダブリンのイギリス軍におけるフィニアンの組織」，第7章「ダブリン・メトロポリタン・ポリス」，第9章「蜂起後のダブリンのフィニアン，1867-79年」，第10章「結論」，となっている。第9章については，S. Takagami, 'The Dublin Fenians after the rising, 1867-79', *Hosei Ireland-Japan Papers*, no. 7, Feb. 1992を参照。暴動史の研究については，松村高夫「イギリス暴動史研究に関するノート」(『三田学会雑誌』78巻6号，1986年2月)，J. Stevenson, *Popular Disturbances in England* 1700-1870 (London, 1979) を参照。

ダブリンでは，7,000名から8,000名のフィニアンが動員されたが，蜂起は一日で終了し，イギリスからの独立という彼らの目標は達成されなかった。5日から6日にかけての夜を，ダブリンにあるマウントジョイ刑務所に収監されていたフィニアン運動の指導者J・デヴォイ（J. Devoy)は，その時すでにフィニアンの敗北を予期していたが，のちにつぎのように回想している。

「私が，斜めに開いていただけの独房の窓によじ登ってみると，雨，みぞれ，雪が絶えず降り続いていた。『神よ，オーバーや暖かい服を着ずに，今夜外に出ている哀れな仲間を助けたまえ。ところで彼らは，一体なんの武器をもって戦うというのか』と，私は悲しく独り言をいった。図り知れない困難そして猛吹雪のなかで，彼らには，どのような戦いができるのだろうか。」[(1)]

デヴォイの回想によると，その夜は非常な悪天候であった。しかしながら，実際のダブリン市の天候は，デヴォイが描写しているほどドラマティックなものではなかった。ダブリン市の郊外にあるフェニックス・パークにある観測所の記録によると，その日の天候は，東の風，少し寒く（cool)，くもりであり，5日の午後9時の気温は4.6度Cで，6日の早朝には小雨が降っていた。[(2)]

ダブリン市郊外の丘陵地帯にあるタラ・ヒルズでは，多数のダブリンのフィニアンが集合し，ゲリラ戦を展開するはずであったが，そこでの天候は市内とは違っていた可能性がある。6日早朝，イギリス軍とともにタラ・ヒルズを行軍したある治安判事は，みぞれと激しい雨が降っていたと報告している。[(3)] 天候状態に特別の配慮をしていなかったフィニアンにとっては，みぞれや雨は不快であったにちがいなかった。しかし，タラ・ヒルズに雪が積もっていたという劇的な状況ではなかったのである。天候によってフィニアンの動員が，支障をきたすほどではなかったのである。だが，後述するように，雨に濡れ，体が冷えたフィニアンがタラ・ヒルズでフィニアンの司令官からの命令を待ち続けることは，容易ではなかったであろう。

いずれにせよ，デヴォイの回想録にある蜂起の夜の記述は，正確ではない。このことは，彼の回想録が蜂起から半世紀近くたってから書かれたことによる不正確さからのみ説明されるものではない。フィニアン指導者が，蜂起の失敗が自らの責任にされることを回避し，悪天候にその原因を求めようとしたからであると考えられる。では蜂起失敗の真の原因は何であったのだろうか。この点を明らかにするために，以下，フィニアン蜂起が，どのように計画され，実際に決行されたのか，なぜ失敗したのか，を詳細に検討し，蜂起失敗の原因を考察することとする。

I　アイルランド共和国臨時政府の樹立

1867年蜂起は，66年12月のフィニアン運動の最高指導者J・スティーブンス（J. Stephens）が，

注（1） J. Devoy, *Recollections of An Irish Rebel* (New York, 1929), p. 193.

（2） この情報を提供してくれたアイルランド共和国，旅行・運輸省(Department of Tourism and Transport）の気象サーヴィスに謝意を表したい。

（3） Magistrate Carte to Chief Secretary, 8 Mar. 1867 (Chief Secretary's Office, Registered Papers (C.S.O., R.P.)1867/3829).

フィニアン・ブラザーフッド（Fenian Brotherhood）の指導者から罷免されたことからはじまった。フィニアン・ブラザーフッドは，合衆国のアイルランド人移民が IRB を支援するために結成した組織である。人身保護律が停止された（29 Vic., c. 4）アイルランドを66年3月に脱出し，フィニアン・ブラザーフッドの指導者の地位に就いたスティーブンスは，66年内にアイルランドで蜂起を決行することを約束し，合衆国内のアイルランド人移民の支持を喚起しようとしていた。アイルランド国内でも，このスティーブンスの蜂起決行の約束は広く信じられ，蜂起へむけて準備がなされていた。しかし，同年12月，スティーブンスは，蜂起にむけてIRBが十分に準備をしていなかったことを理由に，蜂起延期を宣言した。このことは，南北戦争終了後，フィニアン・ブラザーフッドで指導的役割を果たしていたアメリカ軍の退役将校の反発を招くこととなった。ケリー（Kelly）大佐を中心とするアメリカ人将校は，スティーブンスを罷免し，代わって自分たちがフィニアン・ブラザーフッドを指導することとなった。そして彼らは，アイルランドで蜂起することを決定し，蜂起を指揮するためにアイルランドへ渡って行ったのである。

IRBの軍事的な準備状態からすると，スティーブンスの蜂起延期の決定のほうが，より現実的であったと考えられるが，事態は，フィニアン運動がなんらかの行動を取ることによって指導者の誠実さを証明し，ランク・アンド・ファイルのフィニアンの不満を押さえなければ，フィニアン運動が崩壊するかもしれない状況にあった。1867年1月，ダブリン・メトロポリタン・ポリス（Dublin Metropolitan Police, 以下D. M. P. と略す）の D. ライアン（D. Ryan）警視は，警視総監につぎのように報告している。

「秘密結社の下位のメンバーは，ジェームズ・スティーブンスの誠実さについて公然と疑問をなげかけ，そのなかには運動から完全に離脱する意志があるという者さえあった。しかし，主要メンバーは，スティーブンスが約束を実行できなかったことを釈明していた。[4]」

ケリー大佐を中心とするアメリカ人将校の最初の任務は，アイルランドおよびイギリスのフィニアン組織—IRB—を彼らの指導のもとに再編成することであった。1867年1月末イギリスに到着したケリー大佐は，2月10日，IRBの指導者とともに「アイルランド共和国臨時政府」を設立し，その議長に就任した。これによって，1867年蜂起のためのフィニアン組織が再編された。臨時政府の設立直後，ケリー大佐は組織の状態を知るためにG．マッセー（G. Massey）をアイルランドへ派遣した。マッセーは2月12日のダブリンのセンター[5]の会合に出席し，そこで，ダブリンの組織が14,000名を擁し，3,000の武器を所有しているとの情報を得た。マッセーはさらに組織の調査を続け，2月24日にロンドンに戻っている。そして，蜂起計画と決行日を伝達するためにマッセーは再びアイルランドへ派遣された。蜂起は3月5日の真夜中に決行されることとなった。2月26日，この命令はE．オバーン（E. O' Byrne）が招集したダブリンのセンターの会合で明らかにされた。[6]

注（4） Supt Ryan to C.P., 1 Jan. 1867 (C.S.O., R.P. 1867/307 on 1867/12894).

（5） フィニアンの組織は，サークルと呼ばれるグループにより構成されていた。サークルは理論上820名のメンバーから成り，センター（Centre）あるいはAと呼ばれる者を頂点とし，その下に9名のB，81名のC，729名のDを擁するピラミッド型の構造をしていた。

II 蜂起計画

まず，フィニアンはどのような蜂起計画を作成したのかをみてみよう。1867年蜂起の計画の考案者は，フランス人G．クリュズレ（G. Cluseret）将軍であった。クリュズレ将軍は1859年から60年のイタリア統一戦争の際にフランス軍に従軍し，アメリカ南北戦争では北軍側に参加し，南北戦争終了後，フィニアン・ブラザーフッドの指導者と関係をもつようになった。[7] クリュズレ将軍は1866年後半に，10,000名の武装フィニアンによる蜂起計画を立案し，その基本構想は，10,000名の武装フィニアンは「人々の共感を隠れみのにし，船の乗り入れのための最重要地点，そして交通の主要な道路を[8]」確保することによってアイルランド駐留イギリス軍を打ち破る，ということであった。しかし，1867年2月，IRBが10,000名の武装フィニアンを動員できないことを知らされたクリュズレ将軍は，5,000名の武装フィニアンに基づいた計画に変更せざるをえなかった。この計画が最終の蜂起計画となった。しかし，蜂起計画を作成したクリュズレ将軍は，蜂起の失敗を予想して2月15日にパリに帰国し，実際の蜂起には参加しなかった。[9]

クリュズレ将軍の参謀を務めたファリオラ（Fariola）によると，蜂起は二段階にわけて戦われることになっていた。第一段階では，戦略上最適な位置を確保するために「ゲリラ戦」を展開し，第二段階で「正規戦」を開始するというものであった。

第一段階では，フィニアンは軍隊の動きを阻止するために鉄道の中心地と幹線道路を確保することをもくろんだ。ファリオラはつぎのように述べている。

「彼ら（フィニアン）の任務は，15名から多くても20名のきわめて小さな集団で蜂起を開始することである。二つあるいは三つの集団が共同で行動することが許されるのは，成功が確実であるという非常に限られたときだけであって，けっして最初に行動を開始するときではない。これらの集団はけっして軍隊や警察と正面から戦ってはならない。それとは逆に，彼らはあらゆる遭遇を回避し，敵に遭遇したときには，必ず敵を攪乱し，無益で疲労のみが残るような追跡に敵を引きずり込むようにすべきである。警官や兵士の孤立あるいは小集団のあらゆる行動を妨げるために，待ちぶせ攻撃をすべきである。アイルランドという国を絶え間なく不安と不安定の状態に陥れるために，道路・鉄道・電信をすべて連日遮断すべきであり，激しく追跡されたときには機敏に集団を解散すべきである。各集団のチーフは，近くで行動する集団とは独立した行動をとり，自分の地区の軍事司令官からのみ命令を受けるべきである。ある程度時間を必要とする共通の目的のためのいくつかの集団の合同は，軍司令官の命令によってのみ可能

注（6） National Library of Ireland (N.L.I.), MS 7517; State Paper Office (S.P.O.), Fenian Briefs, 6 (c), pp. 21-3.

（7） W. D'Arcy, *Fenian Movement in the United States: 1858-1886* (Washington, 1947), p. 240.

（8） G.Cluseret, 'My Connection with Fenianism', *Frazer's Magazine,* 1 July 1872, p. 35.

（9） *Ibid.,* pp. 57-9; *Irishman,* 12 Sept. 1868.

となる。しかし，すべての集団は隣接の集団と絶えず連絡を取り，地区の集団が共通の，あらかじめ決定された行動をとるために，連絡網が設立されるべきである。[10]」

つぎに第二段階の正規戦についてであるが，フィニアンが正規戦をどのように戦う計画であったのかを示す資料は，存在しない。クリュズレ将軍の悲観論が示しているように，この段階の計画はケリー大佐の無謀さに関係しているかもしれない。ケリー大佐は，「われわれが成し遂げられる最大のことは，交戦国の国民（belligerents）として認められるまで，あるいはアメリカから支援がくるまで持ちこたえることであった[11]」と記述している。ケリー大佐の望みは，アイルランド系アメリカ人が支援してくれる，という確信に基づくものであり，これは蜂起が持ちこたえられることによってのみ実現可能であった。

しかし，ケリー大佐は，アメリカからの支援が得られるまで，どのようにして蜂起を持ちこたえさせればいいのかを十分に考慮しなかった。彼は，3月5日から6日にかけて始まるゲリラ戦に非現実的な自信をもっていたように思われる。ランク・アンド・ファイルのフィニアンの蜂起への大いなる期待に応じ，かつリーダーたちの信頼性を回復しようとした絶望的試みとケリー大佐の無謀な性格，この両者の結合した結果が，フィニアンの蜂起計画であったのである。

以上，蜂起の一般的計画をみてきたが，各地のフィニアン組織はゲリラ戦を開始するという基本計画に基づいてより詳細な計画を作成していた。そこで，つぎにダブリンのフィニアンの蜂起計画をみてみることとする。1867年2月26日，マッセーは蜂起計画をダブリンのセンターの会合で明らかにした。ダブリンの組織の軍司令官に就任したアメリカ人将校ハルピン(Halpin)将軍を中心として，ダブリンのセンターはこの会合後詳細な蜂起計画を立案した。蜂起計画はつぎのようなものであった。ダブリンのフィニアンは，ダブリン市の南西の郊外にあるタラ・ヒルズに集合し，そこを軍事基地としてゲリラ戦を開始し，それによって市内を警護していたイギリス軍を誘い出す。そこでダブリン市内あるいはその近郊に集合したフィニアンが，イギリス軍の不在のダブリン市を攻撃する，というものであった。市内の攻撃は計画されたゲリラ戦の一部であり，論理的にゲリラ戦から期待できる陽動作戦の効果からも導きだせるものであった。

Ⅲ　蜂起に関する情報

治安当局は，フィニアンが蜂起を決行するまえに，スパイを通じて彼らがどのような作戦をとるのかを完全に把握していたといわれている。ここでは，治安当局の蜂起に関する情報の正確度を検証することとする。

1867年2月，ケリー大佐らのアメリカ人将校は，最終的に蜂起に結実する計画を実行に移した。治安当局は，蜂起に関する最初の正確な情報を，アイルランド警察（Irish Constabulary）のスパイ

注（10）*Irishman*, 12 Sept. 1868.
（11）Colonel Kelly to –, 19 Mar. 1867, quoted in D'Arcy, *Fenian Movement in U.S.*, p. 240.

であるコリドン (Corydon) から入手した。コリドンは，アイルランドでの蜂起参加のための動員命令をリヴァプールで待っていたアメリカ人将校であり，66年の終わり頃からリヴァプール在住のアイルランド警察の警察官に情報を流していた。2月14日コリドンは，蜂起は2月18日に決行され，すべてのアメリカ人将校はアイルランドへ行く最終命令を受けた，と警官に報告している。コリドンは，蜂起において「フィニアン軍」を指揮する立場にあるアメリカ人将校であったので，以下に述べるライアン警視に情報を提供していたダブリンのスパイよりもより正確な情報を入手できる立場にあったはずであるが，しかしながら，2月27日までコリドンは蜂起日についての正確な情報を入手することができなかった。

2月16日にリヴァプールを出発したコリドンは，ダブリンでケリー大佐の命令を待っていた。2月26日，コリドンはマッセーが蜂起最終計画を公表した会合に出席し，翌27日，蜂起の情報を警察に流した。[12] コリドンは，ダブリンの蜂起は他の地域よりも一日あるいは二日遅れるだろう，と報告している。[13] コリドンは，実際にはダブリンの指導者に接近する手段をもっていなかったので，ダブリンの蜂起計画の詳細な情報を入手できなかった。蜂起日を別として，コリドンの情報は不確かなものであり，ライアン警視が所有しえた蜂起直前の情報と比較すると，その正確度において劣っていたのである。

2月26日の会合で，ダブリンのセンターは3月5日の夜蜂起決行という指令を受けた。センターは蜂起の24時間前まで蜂起について一切部下に伝達してはならなかったので，蜂起の情報は蜂起直前までダブリンの組織の上層部に限られていた。ライアン警視のスパイにはダブリンの組織の上層部の者がいなかったので，警察にとっては情報の収集は容易ではなかった。したがって，26日の会合直後に，蜂起の情報を得ることはできなかった。しかし，2月末までには，独自の判断でライアン警視は蜂起がまもなく決行されるだろうと確信することとなった。このことは，以下に述べる2月25日の報告書で明らかとなっている。

「秘密結社の拡大の過程で，とくに過去18ヶ月間に，蜂起を開始する日がしばしば決定されたが，何もおきなかった。したがって，この点について正確な結論にたどりついたり，その問題についてのいま飛びかっている様々な情報に信頼を置くことは非常に難しい。しかし，私が確信している一つのことは，もしなんらかの重要な動きが意図されなければ，マッカーファティー (McCafferty)大佐とその仲間はここに来なかっただろう。おそらく過去4，5年間にダブリンのフィニアンがこれほどおとなしくしているときはない。そして街頭での喧嘩，乱暴な行為，酔っぱらい，つまり実際に警察との衝突を起こすかもしれない事件の数は明らかに減っている。[14]」

ライアン警視は，2月26日のマッセーの蜂起日公表の直後にはまだ蜂起日についての正確な情報

注 (12) Brownrigg to -, 27 Feb. 1867 (N.L.I., Larcom Papers, MS 7593).
(13) Brownrigg to -, 28 Feb. 1867 (*Ibid.*).
(14) Supt Ryan to C.P., 25 Feb. 1867 (C.S.O., R.P. 1867/6352).

を得ることはできなかった。蜂起前日の3月4日になって初めて，ライアン警視は部下の情報から3月5日の蜂起決行を確信し，「ダブリン市とキングスタウンのフィニアンと噂される者たちの間に，5名から8名のグループが頻繁に通りで会うというような，非常に明白な兆候を示す活発な活動があった[15]」と D.M.P. の警視総監に報告している。さらに，5日の朝，フィニアンがその夜蜂起を計画しているとの匿名の手紙をライアン警視は受け取っている[16]。このようにライアン警視は，3月5日の蜂起決行を4日の夜になるまで結論づけることができなかったのである。

つぎに治安当局は蜂起計画をどの程度把握していたのかをみてみよう。蜂起がアイルランドだけではなく，イングランド，とくにリヴァプールでも同時に決行される，という情報を2月の半ばまでに治安当局は入手していた[17]。ダブリンの蜂起について，2月19日にライアン警視は，フィニアンが「ダブリン市の攻撃のために市から二マイルほど離れた適当な場所に多数で集合することを計画し[18]」，イギリス軍の兵舎とダブリン城を攻撃する計画をもっている，と警視総監に報告している。この時期にはまだ，ライアン警視は，ダブリンのフィニアンがタラ・ヒルズに集合し，ゲリラ戦を開始することを知らなかったのである。

前述したように，2月26日，マッセーは，ダブリンのセンターとコリドンを含むアメリカ人将校に蜂起の指令を伝達した。翌日コリドンは，フィニアンがアイルランドの中心および高地を占拠するという蜂起計画の特徴を治安当局に伝えている。ダブリンの蜂起に関しては，フィニアンはダブリン市の数ヶ所に火をつけ，十分に武装した4,000名を含む7,000名のフィニアンが，ダブリンの蜂起に参加する，と警官に報告している[19]。コリドンもタラ・ヒルズがダブリンのフィニアンの集合地点であったとは，知らなかったようである。

蜂起が近づくにつれて，ライアン警視はダブリンの蜂起についてコリドンよりも正確な情報を入手するようになった。ある情報によると，ダブリンのフィニアンはウィックロー州に南下し，そこでウィックロー州とウェクスフォード州のフィニアンが合流し，その後ダブリン市を攻撃するという計画をたてているとのことであった[20]。より正確な情報は，ダブリン市の南東に位置するダーキー在住のフィニアンから入ってきた。彼らは，アメリカ人将校 J. バイブル (J. Bible) 大佐に直接接触していた。彼らの情報によると，ダーキーのフィニアンは，ダブリン市からイギリス軍をおびき出し，さらに市の防御を弱体化するために，山沿いにウィックロー州に行進するという計画であった。これは3月1日に入手している。

そして2日後，実際の蜂起計画に近い情報をライアン警視は入手することとなった。この最新の

注 (15) Supt Ryan to C.P., 5 Mar. 1867 (C.S.O., R.P. 1867/3820).

(16) *Ibid.*

(17) H.C. McHale to Inspector General, 19 Feb. 1867 (C. S. O., R. P. 1867/1375 on 1867/3178); Supt Ryan to C. P., 12 Feb. 1867 (C. S. O., R. P. 1867/2642).

(18) Supt Ryan to C. P., 19 Feb. 1867 (C. S. O., R. P. 1867/6341).

(19) Brownrigg, 28 Feb. 1867 (N. L. I., Larcom Papers, MS 7593).

(20) Supt Ryan to C. P., 3 Mar. 1867 (C. S. O., R. P. 1867/3813); Supt Ryan to C. P., 4 Mar. 1867 (C. S. O., R. P. 1867/6338).

情報によれば，ダーキー，キングスタウン，そしてダブリンの郊外のフィニアンが，タラ・ヒルズに行進し，そこに市内からの5,000名のフィニアンが合流する。タラ・ヒルズのフィニアンは，市内のイギリス軍を誘い出す一方，市内の10,000名のフィニアンが市への攻撃を開始する，というものであった。[21] 3日に入手した蜂起計画は，1日に入手した計画を撤回する内容をもっていたが，3月5日に実際におこった経過は，タラ・ヒルズへ集合する「部隊」だけではなく，ウィックロー州へ南下する「部隊」も存在したという複雑な作戦行動を示唆している。

このようにして，治安当局は，ダブリンのフィニアンが，ダブリン市からイギリス軍を誘い出すためにタラ・ヒルズに集合するグループと，市を攻撃するグループとに別れることを知ることになった。蜂起計画に関する情報は，それほど具体性をもっていなかったとはいえ，政府が軍隊を配置するうえで極めて重要なものとなった。なぜなら，その情報によって政府はフィニアンの陽動作戦の裏をかくことができたからである。

3月5日の夕方，アイルランド担当次官（Under Secretary）のT．ラーコム（T. Larcom）は，「ダブリンのフィニアンはタラ，グリーンヒルズに集合し，彼らに対処するために軍隊が市内から出動すると，ダブリンに残された一定数のフィニアンが略奪する計画であるが，軍隊は出動しない。われわれは彼らの背後から攻めるのだ」[22]とアイルランド政府高官への手紙のなかで書いている。アイルランドのイギリス軍司令官ストラートネアラン（Strathnairn）卿は，フィニアンの攻撃から市を防御する責任を引き受け，フォア・コーツ，税関，商品取引所，ブロードストーンとアミアン通りの駅など市内の全要所を自らの監督下においた。[23] このように治安当局は，市内の防御を強化する策に出たが，フィニアンがタラ・ヒルズの集合地点に行くことを阻止することは考えていなかったのである。

Ⅳ 蜂起の経過

1867年3月5日，ダブリンのフィニアンの蜂起は決行された。蜂起は従来考えられていた以上に複雑な様相を呈していたのである。以下，蜂起で実際何がおこったのかを検討してみることとする。

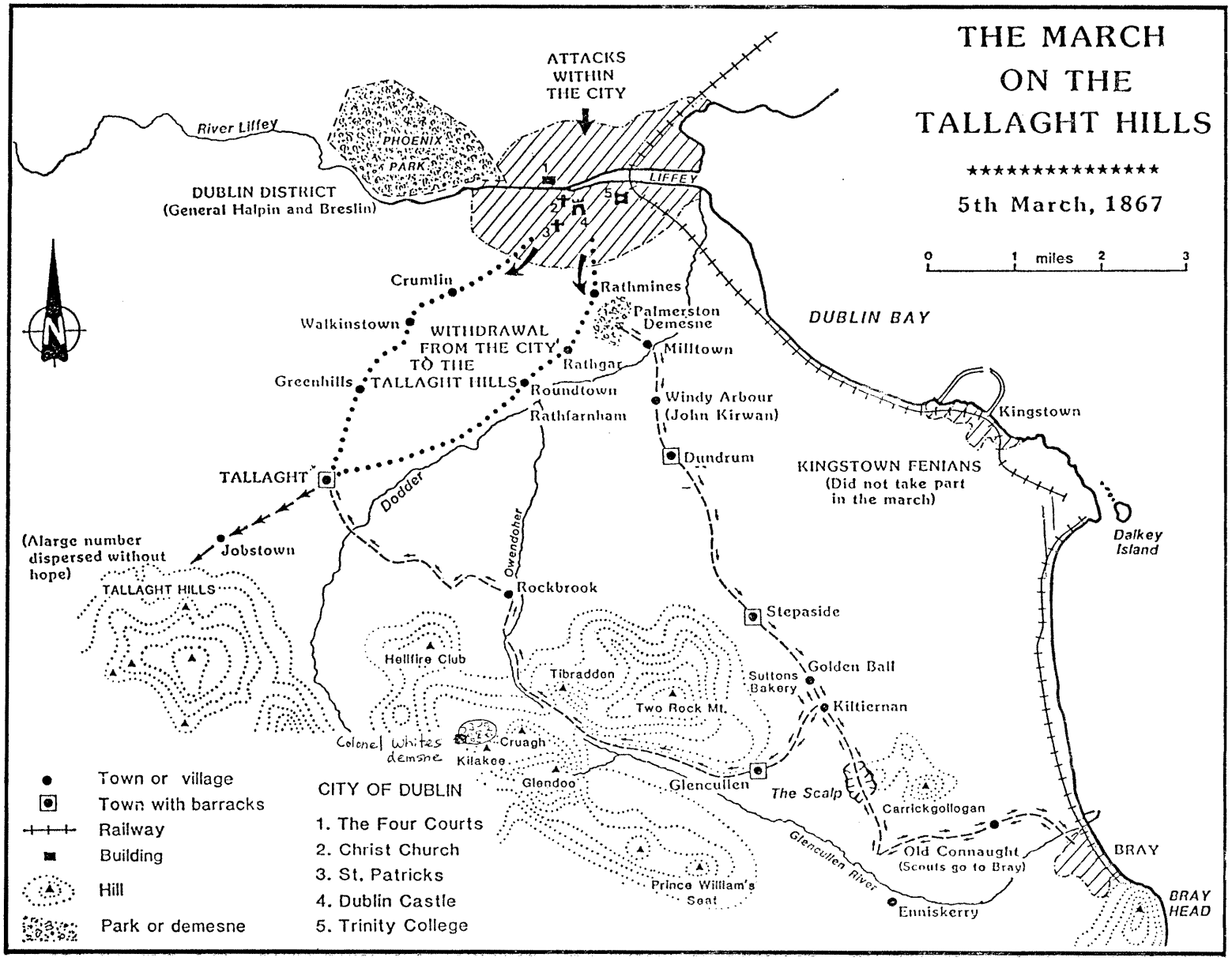
蜂起の際に取った行動から，ダブリンのフィニアンを，6グループに分類することができる。第一のグループはキングスタウンのサークルで，武器が不十分であることを理由に，3月5日の夜に行動をおこさなかった。[24] 第二のグループはJ．キルウェン（J. Kirwan）のグループで，パーマストンの私有地，ウィンディー・アーバーに集合した後，ダンドラム，ステッパサイド，グレンカレン

注（21） *Ibid.*

（22） N. L. I., Mayo Papers, MS 11191, quoted in L. O'Broin, *Fenian Fever: An Anglo-American Dilemma* (New York, 1971), pp. 147-8.

（23） Lord Strathnairn to –, 7 Mar. 1867 (Public Record Office of London (P.R. O.), Home Office Papers(H. O.) 45, 7799/195); O' Broin, *Fenian Fever*, p. 152.

（24） Supt Ryan to C. P., 1 Apr. 1867 (C. S. O., R. P. 1867/5820).


THE MARCH ON THE TALLAGHT HILLS
5th March, 1867
0 1 miles 2 3
ATTACKS WITHIN THE CITY
River Liffey
PHOENIX PARK
LIFFEY
DUBLIN DISTRICT
(General Halpin and Breslin)
Crumlin
Walkinstown
WITHDRAWAL FROM THE CITY TO THE TALLAGHT HILLS
Greenhills
Rathgar
Roundtown
Rathfarnham
Rathmines
Palmerston Demesne
Milltown
Windy Arbour
(John Kirwan)
Dundrum
DUBLIN BAY
Kingstown
KINGSTOWN FENIANS
(Did not take part in the march)
Dalkey Island
TALLAGHT
Dodder
Owendoher
(A large number dispersed without hope)
Jobstown
TALLAGHT HILLS
Rockbrook
Stepaside
Hellfire Club
Tibraddon
Two Rock Mt.
Suttons Bakery
Golden Ball
Kiltiernan
Colonel Whites demsne
Cruagh
Kilakee
Glendoo
Glencullen
The Scalp
Carrickgollogan
Glencullen River
Old Connaught
(Scouts go to Bray)
BRAY
Prince William's Seat
Enniskerry
BRAY HEAD
Town or village
Town with barracks
Railway
Building
Hill
Park or demesne
CITY OF DUBLIN
1. The Four Courts
2. Christ Church
3. St. Patricks
4. Dublin Castle
5. Trinity College

の警察バラックを攻撃した。第三のグループは蜂起作戦の重要なグループで，タラ・ヒルズに集合することに成功した多数のフィニアンから構成されている。しかしこの第三のグループは，計画ではゲリラ戦を開始するはずであったが，命令系統の混乱のために集合後何の行動もおこさずに解散してしまった。第四のグループは，3つの異なった「部隊」からなり，ダブリン市からタラ・ヒルズへ向かう途中，タラの警察バラックを攻撃した。このグループは，前出のデヴォイの記述では，タラの主力部隊として描かれている。第五のグループは，市内の主要な建物を攻撃しようとしたグループである。このグループの人数・計画については詳細な資料がないが，その一員であったデニーフの回想によると，ダブリンのフィニアンの司令官ハルピン将軍からの命令を一晩中待っていた。[25] しかしハルピン将軍からの命令が届かなかったため，市内では何事もおこらなかった。第六のグループは，市の南の郊外に位置するキラキーのホワイト大佐の私有地に集合したグループである。ハルピン将軍は，50名から60名からなるN.ブレスリン(Breslin)のサークルとともに他のサークルを待っていたが，徒労に終わった。[26] デニーフのグループが市内でハルピン将軍の指令を待っていたことからわかるように，ハルピン将軍のグループは市内の攻撃に関係する重要な任務をもっていたと考えられる。

(1) タラ・ヒルズへ

ところで，治安当局は前年の1866年12月に，11名のダブリンのセンターを逮捕し，ダブリンの組織に大打撃を与えていた。したがって，蜂起決行の67年3月までのわずかの期間に，ダブリンの組織は12月以前の状態には復元されなかったと思われる。ダブリンの組織は内部に組織上の混乱を含んだまま蜂起を開始したのである。さらに，蜂起の際にケリー大佐は，ダブリンを含む各地の組織の司令官にアメリカ人将校を任命し，そのアメリカ人将校を頂点とする新たな組織をつくりあげた。警察の報告書に以下のように記述されている。

「彼ら（フィニアン）は国をいくつかの地域に分割し，一定数のアメリカ人将校を各地域に割り当てようとしているが，ダブリン市とその郊外は再組織化され，一人のセンターの指揮下に置かれようとしている。従来からセンターであった者と彼らのサークルは警察による逮捕により，多かれ少なかれ落胆し，壊滅状態にある。一人のアメリカ人将校が，ダブリンのすべてのセンターの指揮を掌握することが予定されている。[27]」

3月5日の朝，G.コノリー(G. Connolly)のサークルのメンバーであるL.オトゥール(O' Toole)は，コノリーのBから，集合場所となっていたホイ(Hoey)のパブに5時半に出かけるよう命令さ

注 (25) J. Denieffe, *A Personal Narrative of the Irish Revolutionary Brotherhood* (New York, 1906), pp. 136-7.

(26) Devoy, *Recollections*, pp. 203-4. S. Takagami, 'The Dublin Fenians, 1858-79' では，ホワイト大佐の私有地をクロンシラとしたが，本稿では S. Courtny 氏の情報によりその所在地をキラキーと訂正する。

(27) Supt Ryan to C. P., 18 Feb. 1867 (C. S. O., R. P. 1867/2767).

れた。そしてそのパブでタラ・ヒルズへ行くようにいわれた。このことは，2月26日の会合で確認された秘密保持が守られ，ランク・アンド・ファイルのフィニアンが，蜂起直前まで蜂起の決行を知らされなかったことを意味している。

さらに，多数のフィニアンは，蜂起の計画についてなにも知らされないままに行動を開始した。例えば，オトゥールは，集会がタラ・ヒルズで開かれるとだけしか聞かされていなかった。[28] また，一部のフィニアンには簡単に勝利しうるという期待感が，支配的であり，なかには，タラ・ヒルズにはスティーブンスと20,000名のフィニアンが集合すると信じる者さえいた。[29]

フィニアンが市内からタラ・ヒルズへ向かう主要なルートは二つあった。一つは，クラムリン，ウォーキンスタウン，グリーンヒルズを通るルートであり，もう一つはラスマインズ，ラスガー，ラウンドタウン（テレニュア）を通るルートであった。市内ではクームとケヴィン通りから多数の馬車が出発するのが警察に目撃されている。クラムリン署の巡査部長は「ダブリンの通りは，タラの方へ向かう若者で混雑している」[30] と報告している。5日の夜，多数のダブリンのフィニアンたちが，タラ・ヒルズでゲリラ戦を展開するために，行進を始めたのである。

(2) キルウェンのグループ

しかし，この夜不可解な行動を取ったグループがあった。それはJ.キルウェンのグループであり，ステッパサイドとグレンカレンの警察バラックの攻略に成功した。蜂起計画では，ダブリンのフィニアンは警察・軍隊との衝突を避け，タラ・ヒルズに集合し，ゲリラ戦を開始することになっていたのであるが，このグループは警察バラックを攻撃したのである。

この警察バラックの攻撃理由として，後に行う予定のゲリラ戦術を時期尚早に開始したこと，あるいは，警察バラックが容易に攻略でき，不足した武器を増強することができるというこのグループの確信などが考えられるが，彼らが作戦の不可欠な部分として，陽動作戦を展開したからであった。後述するように，ランク・アンド・ファイルの若者の一部が不必要な性急さからタラの警察バラックを攻撃したが，そのグループとは対照的に，このグループは行進ルートの途中にある警察バラックに注目していたのである。このグループは，市内から軍隊を誘い出すという計画全体の一部であるだけでなく，タラからも軍隊を誘い出そうとしたと推測される。

他のサークルが参加している可能性を排除できないとはいえ，このグループの中核は，キルウェンのサークルである。アイリッシュ・ペイパル・ブリゲイト（Irish Papal Brigade）の軍曹の経歴をもっていたキルウェンは，軍事的知識をもっていただけではなく，自分のサークルを頻繁に軍事教練していた。さらに，このグループには，第9ランサーの元兵士であったP.レノン（P. Lennon）がおり，レノンはキルウェンの副官を務めていた。このように，キルウェンを長とする強力なリー

注 (28) S. P. O., Fenian Briefs, 6 (a), p. 60.
(29) *Ibid.*, p. 128.
(30) C. P. O'Ferrall to U. S., 5 Mar. 1867 (N. L. I., Larcom Papers, MS 7594).

ダーシップのもとにあったため，この夜の最も指導された，成功したグループとなった。また，彼のサークルは，他のサークルに比較して多数の武器を所有していた。[31]

5日のこのグループの行動は，その約半数が，ラスマインズのパーマストンの私有地に集合したことをもって始まった。この時点でこのグループはレノンの指揮下にあったが，このグループがミルタウン・ロードをダンドラム・ロードに向かって行進していた午前0時，ミルタウンでD.M.P.のE部門の4名の警官を捕虜とした。捕虜となった警官によると，このグループはライフル，拳銃，やり，剣で武装していた。彼らは4名の警官を引き連れてダンドラムの方向へさらに行進し，ウィンディー・アーバーでキルウェンに率いられたグループと合流し，キルウェンが全体の指揮を取ることとなった。[32]

キルウェンのグループが最初に攻撃したのは，ダンドラムの警察バラックで，彼らは警察バラックに発砲し，隣接した家々の窓を壊した。[33] しかし，彼らは途中で警察バラックの攻撃を中止し，ステッパサイドの方へ向かった。彼らがダンドラムの警察バラックの攻撃には固執せずに，後方の警察バラックを攻撃したのは，軍隊を市内からさらに遠方に誘い出したいというもくろみからであった。キルウェンは警察バラック攻撃中に，怪我をし，それ以降，レノンが指揮を取ることとなった。[34]

6日午前2時，このグループは，アイルランド警察のマッケルウェイン(M' Ilwaine)巡査と4名の警官が駐在するステッパサイドの警察バラックに到着した。警官は蜂起についての情報を与えられていたけれども，フィニアンの攻撃に対して十分な準備体制をとってはいなかった。[35] 警察バラック到着直前，レノンはライフルを装備する16名に戦闘準備を命じた。そして，レノンはドアをノックし，警官に「アイルランド共和国」の名において降伏することを要求した。警官が降伏を拒絶したために，フィニアンは発砲を開始し，警官も反撃に出た。フィニアンは窓を破り，大量のわらを押し込んで，建物に火を付けようとしたため，マッケルウェイン巡査は無条件で降伏した。フィニアンは5名の警官を捕虜にし，5丁のライフルと弾薬を持ち去っていった。[36]

フィニアンは，捕虜にしたD.M.P.の4名の警官とアイルランド警察の5名の警官を捕虜として引き連れて，ブレイの方向へ行進していった。オールド・コナクトに到着したとき，ブレイの警察バラックの状態を確かめるために偵察隊が派遣された。すでに警察バラックを攻撃したこのグループがブレイに前進したのは，計画に基づかない衝動的行動であったのであろうか，あるいは，計画に基づく戦術の一部であったのだろうか。このグループあるいはその一部は，直接タラ・ヒルズ

注 (31) C.S.O., R.P. 1867/7199;Devoy, *Recollections,* p.197.

(32) Supt Donovan to C.P., 6 Mar. 1867 (C.S.O., R.P. 1867/3819); Supt Ryan to C.P., 2 Apr. 1867 (C.S.O., R.P. 1867/5841 on F 3637); S.P.O., Fenian Briefs, 6 (a), pp. 97, 165; Devoy, *Recollectios,* p.200.

(33) *Freeman's Journal,* 7 Mar. 1867.

(34) Devoy, *Recollections,* p.200.

(35) S.P.O., Fenian Briefs, 6 (a), pp. 21, 55.

(36) Constable M' Ilwaine to Sub-Inspector Burke, 7 Mar. 1867 (S.P.O., F Papers, F 2694); S.P.O., Fenian Briefs, 6 (a), p.95; Devoy, *Recollections,* p.200.

に前進する命令を受けた他のサークルよりもより大きな戦術的目的をもっていた可能性がある。このことは，このグループが南西にあるタラ・ヒルズではなく南東の方角へ前進したということからも推察できる。

このグループの一員であったH. フィルゲイト (H. Filgate) によると，彼らの目的地はウィックロー州にあるアークロー近くの場所であった。[37] これは，蜂起後数十年経ってからの言明であるとはいえ，前述のライアン警視が入手した情報によれば，ダーキーのフィニアンは市内から軍隊を誘い出すことを目的としてウィックロー州および山沿いに前進することを命令されており，このフィルゲイトの記述を裏づけるものである。

「ブレイ（のバラック）は非常に強固であり，騎兵隊がダブリンから向かっている」[38] という情報が偵察隊から入ってきたため，グループは行進してきた道を戻り，「ダブリンの山々に行き，われわれが見つけることができるすべての警察バラックを破壊する」[39] ことを決定した。偵察隊からの情報によって，計画と目的地の変更が余儀なくされたのであろう。300名から400名のフィニアンがこの段階で「主力部隊」から別れ，タラ・ヒルズに向かうこととなった。

一方，「主力部隊」はキルターナンそしてゴールデン・ボールに前進し，グレンカレン・ロードに沿って行進を始めた。「主力部隊」がグレンカレンの警察バラックに到着したのは，午前6時から7時の間であった。「主力部隊」は，軍隊が市内から向かっているという偵察隊の報告を受け，軍隊との直接の戦闘を避けるというクリュズレ・ファリオラの指令にしたがって行動した。

捕虜にされた警官の一人であるマッケルウェイン巡査は，「グレンカレンに近づくと，ライフルを装備した50名に最前列に出て攻撃をし，やりを持った者たちに後ろに下がるよう，命令がだされた」[40] と攻撃前の様子を後に述べている。レノンはドアをノックし，降伏することを要求した。オブライエン (O' Brien) 巡査と4名の警官はフィニアンの攻撃を警戒するよう指導されていたため，バラックのドアと窓を夜のように閉めていた。フィニアンは窓ガラスを破り，大ハンマーのような重い武器で後ろのドアをたたき，バラック内に突入しようとした。それに対し警官はフィニアンにむけて発砲を開始した。警官の抵抗は，ステッパサイドよりも強固なものであり，銃撃戦は1時間程続いた。

そこでフィニアンは，バラック内の警官に降伏するようマッケルウェイン巡査に説得を命じた。マッケルウェイン巡査は発砲を中止しなければ捕虜となった警官が撃たれるだろうとオブライエン巡査に伝えた。オブライエン巡査は，命令に同意し，捕虜釈放を条件にドアを開けた。ドアが開けられるやいなや，フィニアンは中に入り武器と弾薬を奪った。そして彼らは捕虜となった警官を見張る者をそこに残し，タラ・ヒルズの方向へ出発していった。捕虜となった警官は，午前9時前に

注 (37) Devoy, *Recollections*, p. 200.
(38) S. P. O., Fenian Briefs, 6 (a), p. 98.
(39) Devoy, *Recollections*, p. 200.
(40) S. P. O., Fenian Briefs, 6 (a), p. 155.

釈放されている。[41]

これらの警察バラックを襲撃したグループが，何名のフィニアンから構成されていたのかを示す明確な資料は存在しない。捕虜となった警官は，自分たちの降伏を正当化するためにフィニアンの人数を誇張していたかもしれない。パーマストンの私有地に集合したフィニアンは，ウィンディー・アーバーでキルウェンのグループと合流し，ダンドラムおよびステッパサイドの警察バラックを攻撃した。そしてグレンカレンに到着するまえに，このグループからタラ・ヒルズに向かうグループが分離している。

パーマストンの私有地でこのグループを目撃した警官は，500名がそこにいたと証言している。このグループは，ウィンディー・アーバーでキルウェンのグループと合流するまえに，ミルタウン・ロードで警官に目撃されている。そのうちの一人は人数を300名あるいは400名とし，もう一人は800名あるいは900名と報告している。ステッパサイドの警察バラックが攻撃されたときには，すでにキルウェンのグループが合流しており，グループの人数は最大となっていた。ステッパサイドのバラックに駐在していたマッケルウェイン巡査によると，1,000名のフィニアンが攻撃したと語っていたが，後にその数を500名と修正している。[42] 1名の目撃者を除いては，グループの人数を500名以上とみな一致し，2名の目撃者は800名から1,000名としている。

タラ・ヒルズに前進するグループが分離した後，フィニアンはグレンカレンの警察バラックを攻撃した。その人数については二つの証言がある。この警察バラックに居た警官は，約600名のフィニアンに攻撃されたと語っている。[43] 一方，警官の捕虜と200名のフィニアンがグレンカレン方向へ行進しているのが，ゴールデン・ボールで目撃されている。[44] 後者の供述の方が，前者よりも信憑性があると考えられる。ステッパサイドの警察バラック襲撃後，一部はタラ・ヒルズに向けて出発しており，この供述は，それによってフィニアンの人数が減少したことを裏づけている。

グレンカレンの警察バラックの攻撃は，午前7時すぎには終了した。後述するように，この数時間まえには軍隊がタラ・ヒルズに到着しており，そこにいた蜂起の主力部隊は離散を余儀なくされ，そのなかには市内に戻っている者もあった。6日の日中に警察・軍隊によるフィニアンの逮捕が終了するまで，彼らはダブリンの郊外に身を隠し，市内に戻る機会を伺っていた。デヴォイによると，彼らは最終的に無事に家に戻ったということである。[45]

このようにキルウェンのグループは離散をせざるをえなかったが，彼らは決して逃走したわけではなかった。このグループの行動は，蜂起のなかで最も目的意識のあるものであった。彼らは遠くオールド・コナクトまでも前進し，整然と退去し，その過程でグレンカレンの警察バラックを攻略した。キルウェンがその夜の最初の攻撃で負傷し，リーダーの地位を引き渡したにもかかわらず，

注 (41) *Ibid.*, pp. 156, 167, 169.
(42) S. P. O., Fenian Briefs, 6 (a), pp. 93, 97, 155.
(43) Constable O' Brien to Sub-Inspector Burke, 6 Mar. 1867 (S. P. O., F Papers, F 2694).
(44) Supt Ryan to C. P., 6 Mar. 1867 (C. S. O., R. P. 1867/3750).
(45) Devoy, *Recollections*, p. 201.

彼らは非常に統制のとれた集団であった。そしてキルウェンに代わってこのグループを統率したレノンの有能さも注目に値するであろう。

それではなぜこのグループは解散したのであろうか。彼らがタラ・ヒルズに近づいたときには，そこに集合していたフィニアンが，後述するフィニアンのタラの警察バラックへの攻撃失敗の知らせを携えて，次第にタラ・ヒルズから消え失せていたことは想像に難くない。このグループの役割はタラ・ヒルズに集合したフィニアンによって無視されてしまった。というのは彼らの行動はタラ・ヒルズに集合していたフィニアンを助けることであったからである。このグループが，ダブリンおよびウィックローの丘陵地帯の東側でゲリラ活動を組織することと，陽動作戦を遠隔地（遠くアークロー）にまで展開するという二重の任務を担っていたとするなら，彼らの行動の重要性は非常に大きいものであった。いずれにしてもこのグループの行動は，タラ・ヒルズに多数のフィニアンが集合することが，非常に複雑な戦術の一部にすぎないということを示している。

(3) タラの警察バラックへの攻撃

参加した人数でもっとも多かったのは，市内からタラ・ヒルズに集合したグループであった。多数のフィニアンがタラ・ヒルズに到着したにもかかわらず，一つのグループがタラでいわゆる「大惨事」を引き起こしてしまった。その夜すでに投獄されて，後に不十分な情報しか与えられなかったデヴォイは，回想録のなかで以下のように述べている。

> 「数千名からなるが，十分に武装されていないフィニアンの中核的グループが，タラへの道を行進していた。真っ暗の夜に前衛部隊もなく，なんらの事前の対策もとらず，村の近くで60丁の警察のライフルが彼らに向けて一斉に発射されたとき，オドノフー（O' Donoghue)は殺され，数名が負傷し，……彼らは急いで逃亡しはじめ，混乱状態のなかでダブリンにできるだけ速く戻ろうとした。[46]」

しかし，以下にみるように，デヴォイの記述にはいくつかの誤りがある。

治安当局は，フィニアンがタラの警察バラックを攻撃することを予想して，警官を5名から15名に増強した。5日午後2時，ラスファーナムの警察バラック駐在のJ.ケネディ（J. Kennedy）巡査は，D. F. バーク（D. F. Burke）警部補からタラの警察バラックを補強せよという指令を受取り，午後9時半，4名の警官とともにタラの警察バラックに到着した。[47] バーク警部補自身も警官の指揮を取るために午前0時，警察バラックに到着していた。

バーク警部補がフィニアンに対し行動開始を指示するまえに，タラで警察とフィニアンの間で戦闘があったという記録はない。フィニアンが，蜂起計画にしたがって警察との衝突を避け，タラ・ヒルズに行進していったからである。バーク警部補の行動は，ステッパサイドおよびグレンカレンの警官とは対照的であった。彼の一団は比較的規模が大きく，攻撃的姿勢を取ることが可能であっ

注（46） *Ibid.*, pp. 203-4.

（47） S. P. O., Fenian Briefs, 6 (a), pp. 3, 36.

た。彼はまた経験のある決然とした警官であった。もちろん，大人数のフィニアンに対し警官15名は劣勢であったとはいえ，十分に武装されておらず，軍事教練も満足に受けていないフィニアンに対しては，訓練された警官15名の方が有利であったと考えられる。午前0時から午前1時の間にバーク警部補は，フィニアンを逮捕するために警官にバラックから出て道の向こう側に整列するように命じた。[48] これは，15名という人数を考えれば，小さな建物のなかでフィニアンの攻撃に対処するよりも有効な防御体制であった。

タラ・ヒルズに前進途中の三つのグループが，このバーク警部補らの警官隊に遭遇した。第一および第二のグループは，警官隊との対決を回避している。このことから，彼らの目的は警官を攻撃するのではなく，タラ・ヒルズに到達することであったことがわかる。だが，第三のグループは，軍隊・警察との対決を避けるという命令を無視し，警官を攻撃したため，「大惨事」を引き起こした。

第一のグループはラウンドタウンの方角から行進してきた。バーク警部補は前進するならば発砲すると彼らに伝えた。このグループは，攻撃的な行動を取らず退却していった。[49] 第二のグループはグリーンヒルズの方角から行進してきた。バーク警部補は30歩から40歩の距離にフィニアンが近づいたとき，女王の名のもとに降伏することを促し，これ以上近づくならば発砲すると警告した。フィニアンは投石したが，もと来た道を戻っていった。[50]

6日午前1時頃第三のグループがラウンドタウンの方角から行進してきた。このグループはS．オドノフー（S. O' Donoghue）のサークルである。バーク警部補はこのグループにも降伏するように命じたが，彼らは第一・第二のグループとは同じ行動を取らなかった。後に警官が証言したところによると，「反乱者のなかでリーダーと思われる一人が，『今だ，同志。今だ，撃て』と叫び，彼らに発砲することを命じた。反乱者は一斉に50発あまりの弾丸をわれわれに発砲した。バーク警部補はわれわれに膝をつき発砲することを命じ，その命令は遵守された。[51]」警官による反撃は，フィニアンに混乱を引き起こし，そのなかの一人である元イギリス兵が再び隊列を整えさせようとしたが無駄であった。[52] さらに，センターのオドノフーとT．ファレル（T. Farrell）が重傷を負い，後日死亡した。[53]

氏名の特定はできないが，このグループの一員であったフィニアンの書き残した資料によると，このグループが「大惨事」を引き起こした理由として，三点あげることができる。[54] 第一点は，150名が20丁のライフルしか所有しておらず，このグループは武器を十分に所有していなかったということである。このグループのメンバーの大多数は，一度タラ・ヒルズに到達すれば，武器が供給さ

注（48） S. P. O., Fenian Briefs, 6 (a), p. 36.
（49） *Ibid.*, p. 68.
（50） *Ibid.*, pp. 36, 41.
（51） *Ibid.*
（52） Devoy, *Recollections*, p. 204.
（53） *Irishman*, 9 Mar. 1867を参照。
（54） Supt Ryan to C. P., 31 Dec. 1867 (C. S. O., R. P. 1867/22667 on 2103R).

れると信じていた。第二点は，オドノフーがメンバーを適切に軍事教練していなかったということである。20丁のライフルは，「その使い方を知っている少数および知っていると自慢した者」にのみ与えられた。第三点は，警察を攻撃することなく，タラ・ヒルズに行進せよという命令に従わなかっただけではなく，警察バラックを積極的に攻撃しようと考える者がこのグループにいたということである。とくに「非常に若い者たち」は命令を理解しないか，あるいは無視した。これらの若者たちが，警察バラックへの攻撃を要求していたのである。おそらくリーダーは彼らを統率することができなかったのであろう。警官への攻撃を強く主張したにもかかわらず，攻撃後最初に逃走したのはこの若者たちであった。

先にみたデヴォイの記述には三つの誤りがある。第一に，オドノフーの指揮下にあったフィニアンの人数は「数千名」ではなく，150名からなるグループにすぎなかったのである。第二に，タラの警察バラックに駐在していた15名の警官では「60丁のライフル」を発射することは不可能であった。警察は，フィニアンが蜂起を開始し，タラ・ヒルズに行進することを事前に知っていた。治安当局の戦術はフィニアンをタラ・ヒルズに自由に行かせ，タラ・ヒルズに向かうフィニアンを途中で逮捕することではなかった。そのために，多数の警官をタラの警察バラックには集合させず，わずか15名の警官にタラの警察バラックを防御させたにすぎなかった。第三に，デヴォイは多数のフィニアンがタラ・ヒルズにすでに到達していたことを述べずに記述を終えている。デヴォイが意図的に記述しなかったのか，あるいはこの事実を知らなかったのか，についてはわからない。

さて，何名のダブリンのフィニアンがタラ・ヒルズに到達したのであろうか。蜂起直後，アイルランド担当次官ラーコムによれば，蜂起参加人数を把握することは暗闇のために不可能であった。それゆえ，資料によって参加人数は異なっている。3月7日付の『フリーマンズ・ジャーナル』(*Freeman's Journal*) は，4,000名から5,000名のフィニアンがタラ・ヒルズに到達したらしいと書いているが，翌日にはその人数を2,000名としている。[55] 新聞はこれらの情報を確実な情報源から入手しているわけではない。

警察は7,000名から8,000名が集合したと報告しているが，これが知りうる数値のなかでもっとも大きい。だが，この警察報告による人数は決して推測からでたものではない。蜂起の夜，任務に就いていた警官が，5日午後10時45分から翌午前1時あるいは2時までの間に数千名のフィニアンがタラ・ヒルズに向かって行進している，と報告しているからである。[56] また，蜂起計画が発表された1867年2月の会合で，蜂起に動員可能なダブリンのフィニアンの総数が7,000名であるとされ，[57] 実際この7,000名がタラ・ヒルズに集合したという可能性を否定することはできない。したがって，少なくとも数千名のフィニアンがタラ・ヒルズに到達することに成功したと推測することは誤りではないであろう。

注 (55) *Freeman's Journal*, 7 and 8 Mar. 1867.
(56) Supt Ryan to C.P., 6 Mar. 1867 (C.S.O., R.P. 1867/3750).
(57) Brownrigg to –, 28 Feb. 1867 (N.L.I., Larcom Papers, MS 7593).

数千名のフィニアンがタラ・ヒルズに集合した。しかし，彼らは蜂起計画通りにゲリラ戦を開始することができずに，解散してしまったのである。「大惨事」発生の原因は，タラの警察バラックでの警官との衝突ではなく，タラ・ヒルズという蜂起の拠点に到達したフィニアンをリーダーが利用できなかったことにある。つまり，フィニアンのリーダーたちが，多数のメンバーを動員することに成功したにもかかわらず，タラ・ヒルズに集合したフィニアンを指揮し，彼らの士気を維持するようなリーダーシップを確立することに失敗したからである。

(4) 蜂起への治安当局の対応

治安当局は，フィニアンがタラ・ヒルズに行進することを許しはしたものの，その夜の「反体制的」行動を黙認する意図はなかった。アイルランドのイギリス軍司令官ストラートネアラン卿は，二つの遊撃隊をダブリンとニューブリッジの二方面からタラ・ヒルズに派遣した。[58] パーマストンの私有地には，第92ハイランダーズの一部を派遣したが，その到着は遅すぎた。ストラートネアラン卿自身，第52連隊，スコッツ・グレイ，第9ランサー，ローヤル・ホース・アーティラリーから構成される遊撃隊を率いて，クラムリン・ロードを前進し，6日午前2時クラムリンの村に到着した。遊撃隊は，この村にローヤル・ホース・アーティラリーの砲兵隊を残し，グリーンヒルズの方角へ前進を開始した。タラへ行く途中，この前哨隊はタラからやって来たフィニアンを逮捕した。[59] おそらくこれらはタラの警官を攻撃後，退却していったフィニアンであろう。

軍隊がタラに到着したときには，警官は近隣をパトロールし，出会った者すべてを逮捕した。その数は約50名にのぼる。軍隊は，その行軍中逮捕したフィニアンを第52連隊の監視のもとにタラの警察バラックに残し，タラ・ヒルズに向けて行進を開始した。軍隊がタラ・ヒルズに到着すると，一部のフィニアンは武器を捨て逃走した。そして軍隊は数名のフィニアンを逮捕している。この段階における軍隊の行動は，限定されたものではあったが，フィニアンが〈リーダーがいたと仮定して〉その場に陣地を確立することを阻止した点において決定的な意味をもった。しかし，正規軍が暗闇の丘陵地帯を前進することは困難であったので，彼らは数名のフィニアンを逮捕後，行動を中止せざるをえなかった。[60] こうして，タラ・ヒルズでは，フィニアンと軍隊の衝突はおこらなかったのである。

ストラートネアラン卿によると，軍隊はその夜，93名のフィニアンを逮捕した。[61] 明らかに，タラ・ヒルズに集合した多数のフィニアンは逮捕を免れたのであった。この93名とタラの警察に逮捕された約50名とあわせて，140名がダブリン城のローワー・キャッスル・ヤードに連行された。[62]

注 (58) Lord Strathnairn to -, 7 Mar. 1867 (P.R.O., H. O. 45, 7799/195).

(59) Magistrate Carte to Chief Secretary, 8 Mar. 1867 (C. S.O., R. P. 1867/3829); S. P. O., Fenian Briefs, 6 (a), pp. 12, 14; *Freeman's Journal*, 7 Mar. 1867; *Irishman*, 9 Mar. 1867.

(60) Magistrate Carte to Chief Secretary, 8 Mar. 1867 (C. S. O., R. P. 1867/3829).

(61) Lord Strathnairn to -, 7 Mar. 1867 (P.R.O., H.O. 45, 7799/195).

(62) Magistrate Carte to Chief Secretary, 8 Mar. 1867 (C.S.O., R.P. 1867/3829).

警察は，タラ・ヒルズから市内に戻ってくるフィニアンを逮捕するために，運河にかかった橋に見張りを置き，ポートベロ橋，アイランド橋，グリフィス橋で，6日朝，20名を逮捕した。さらに，職務質問に満足に答えられない者全員を逮捕した。[63] その結果，警察・軍隊に逮捕され，ダブリン城に連行された者は，6日午後までに207名となった。[64] 治安当局は蜂起に参加した大多数のフィニアンを逮捕することに失敗した。逮捕を免れたフィニアンは，警察が見張りを撤去するまで郊外で時間を稼ぎ，そして無事に帰宅したのである。

1867年4月8日，ダブリンで，蜂起に関係した約200名の特別裁判が開かれた。キルメイナム刑務所からコート・ハウスまで犯人護送車を警護する騎兵隊はやじられ，コート・ハウス付近の道は不満を示す人々で混雑していた。[65] フィニアンとその支持者は治安当局にあからさまな敵意を示していたのである。

治安当局は140名の検事側証人をたてたが，そのうち81名が蜂起に関与したフィニアンに対する証言をおこなった。この81名の内訳は，47名の警官，15名の兵士，1名の治安判事などであり，フィニアンは3名にすぎなかった。このことは，治安当局がフィニアンを検事側証人にたてることを失敗したことを示唆している。47名の警官のうち，タラ，ステッパサイド，グレンカレンの警察バラック駐在者とフィニアンに捕虜にされた者10名の証言は重要である。なぜなら，彼らが警察に対するフィニアンの攻撃を証言しえたからである。これとは対照的に，他の警官および15名の兵士を含む証人は，蜂起について決定的な証言をすることはできなかった。彼らは，フィニアンを逮捕したり，タラ・ヒルズへ行進するのを目撃しただけであったからである。[66]

検察側は，個々のケースを調査した結果，逮捕されたフィニアンの大多数が，ランク・アンド・ファイルであり，彼らは単にタラ・ヒルズに集合したにすぎないと判断した。したがって，大多数は，5月末までに無条件に釈放あるいは保釈された。検察側は，G.コノリー（G. Connolly）とP.ドーラン（P. Doran）を除いて，大部分の者に対して大逆罪を適用せずに，軍および武器法（Military and Arms Acts）で処理し，28名に様々な期間の懲役・禁固刑を科した。[67] 10名が警察バラックの攻撃に参加していたことを理由に起訴されたが，4名だけが1年から2年の禁固刑を科せられたにすぎない。そして22名は，武器の不法所持で3ヶ月から2年間投獄されることとなった。[68] 蜂起を積極的に準備したコノリーは，7年の懲役刑を，ステッパサイドおよびグレンカレンの警察バラックを攻撃したグループのリーダーの一人であるドーランは終身懲役刑を受けた。ダブリンのフィニアンを指揮するはずであったハルピン将軍も逮捕を免れることができなかった。彼は，1867年7月，

注 (63) S.P.O., Fenian Briefs, 6 (a), pp. 74, 103-4, 106, 116.

(64) *Irishman*, 19 Mar. 1867.

(65) Chief Supt Campbell, 2 May 1867 (N.L.I., Larcom Papers, MS 7594); C.P. Lake to U.S., 6 May (C.S.O., R.P. 1867/8113); Inspector Kelly to Chief Supt Campbell, 9 May 1867 (C.S.O., R.P. 1867/8524).

(66) S.P.O., Fenian Briefs, 6(a).

(67) N.L.I., MS 7517, p. 285; S.P.O., 'Fenianism Index of Names, 1866-71'.

(68) S.P.O., Fenian Briefs, 6 (a), pp. 20, 58-9, 163, 165, 177.

ブレスリンとともに逮捕され，10月，15年の懲役刑に処せられている。[69] ドーランは死刑を宣告されたが，判決後，陪審が即座に処刑延期を主張した。また，フィニアンの死刑囚に対する広範な減刑運動が展開されたために，処刑を免れることになった。このことから，フィニアンの蜂起に対するアイルランド人の共感が確認できよう。

V　蜂起失敗の原因

最後に，ダブリンの蜂起が失敗した原因を考察することにしよう。確かに，フィニアンは武器を十分に所有しておらず，また治安当局は蜂起について情報を入手していた。しかしながら，蜂起失敗のより決定的な原因は別のところに求められる。すなわち，ダブリンの蜂起の失敗は，タラの警察バラックでの敗北にあるのではなく，タラ・ヒルズに実際集結した数千名のフィニアンがなんの役割も果たすことができなかったことにある。タラ・ヒルズを集合地点に設定したことは，軍事的観点からすれば，重要な選択であった。タラは市内に通じるいくつかの道が交差する地点であり，フィニアンはタラに邪魔されることなく前進することができたからである。実際，イギリス軍は，ダブリンの丘陵地帯には容易に入りこむことができず，追跡を中止しなければならなかったので，タラ・ヒルズに集合したフィニアンの多くは逮捕を免れた。

蜂起失敗の原因をより詳細に解明するために，ダブリン蜂起の司令官ハルピン将軍の置かれた状況をみてみよう。3月5日の夜，デニーフはカムデン通りにあるパブでハルピン将軍と会ったが，ハルピン将軍はそのときほど冷静で，落ち着きはらい，理性的であったことはないと述べている。[70] しかし，翌日ハルピン将軍は落胆し元気を失っていた。[71] ハルピン将軍自身から話を聞いたデヴォイによると，6日ハルピン将軍はラスファーナムのパブでビリヤードをして警察の見張りが撤去されるのを待ち，その夜には市内に戻ったとのことであった。[72]

5日から6日の夜にかけて，ハルピン将軍は，ダブリンの南にあるキラキーのホワイト大佐の私有地で，N. ブレスリン（N. Breslin）と彼のサークルのメンバーとともに，他のサークルが集合するのを待っていた。その場に集合する予定であったサークルの数は不明であるが，実際には，他のサークルはその場にあらわれなかった。[73] ホワイト大佐の私有地に集合する予定であったグループの正確な意図は不明である。しかし，蜂起の指導者ハルピン将軍が多数のフィニアンの集合地点であるタラ・ヒルズではなく，ホワイト大佐の私有地に早い時期にいたという事実は，このグループが重要な任務をもっていたことを示している。このグループは，タラ・ヒルズに集合したフィニアンとともに，イギリス軍を市内から誘い出す役割をもっていただけではなく，ハルピン将軍の存在が

注 (69) S. P. O., F Papers, F 4092, 5246 R.
(70) Denieffe, *A Personal Narrative*, p. 136.
(71) *Ibid.*, p. 137.
(72) Devoy, *Recollections*, p. 204.
(73) *Ibid.*, p. 203.

示すように蜂起に参加したフィニアンを統率し，ゲリラ戦の展開を指導する役割をももっていたと推定できる。また，5日の夕方カムデン通りでハルピン将軍とデニーフが会っているという事実からも明らかとなるが，デニーフが市内で攻撃命令を待っていたように，ハルピン将軍のグループとデニーフのグループは，協調行動を取るはずであった可能性も排除できない。いずれにしても，蜂起の失敗を考えるうえで，ホワイト大佐の私有地にフィニアンを動員しえなかったことが，重要となる。

先にみたように，蜂起計画では，各グループはダブリンの蜂起の司令官ハルピン将軍からのみ指令を受けることになっていた。このことは，ハルピン将軍一人に作戦決定が集中されていたことを意味している。しかし，この態勢には二つの弱点があった。第一は，蜂起の詳細をメンバーに伝達することに障害が生じ，いくつかのサークルを計画どおりに動員することができなかったという点である。この伝達の断絶は，ハルピン将軍とデニーフの指揮下に行動する予定であったグループに顕著にあらわれている。第二は，ハルピン将軍が，タラ・ヒルズにいるサークルのセンターとの間に伝達の手段をもっていなかったという点である。タラ・ヒルズとキラキーは数マイルしか離れていないとはいえ，丘陵地帯での，ましてや夜間において，命令の伝達は不可能であったろう。それゆえ，タラ・ヒルズでは命令を待ち続けるグループが存在し，ハルピン将軍は市内とタラ・ヒルズから離れた地点で50名程のフィニアンと孤立しているという絶望的な状況が現出したのである。

おそらくハルピン将軍は，陽動作戦の中心であるタラ・ヒルズでの集合と市内の行動計画に不都合なことがおこったことを知りながら，キラキーで無益に待機した後，ラスファーナムに行ったにちがいない。いつハルピン将軍がラスファーナムに行ったのかを正確に知ることはできないが，六日をそこで過ごしたことは明らかである。タラ・ヒルズのフィニアンが解散することによって蜂起失敗の知らせが，ハルピン将軍を蜂起の主要な失敗の現場に近づけさせたのかもしれない。タラ・ヒルズのフィニアンは，なんら命令を与えられぬまま，蜂起は終わったと自ら結論づけねばならなかった。このように，ダブリンの蜂起を失敗に導いたのは，ランク・アンド・ファイルを動員しえなかったことにあったのではなく，リーダーたちの不十分な作戦指導ならびに詳細な軍事計画の欠如にあったのである。

以上，蜂起を考察することによって，アメリカ人将校が，センターや個々のサークルの有能なリーダーたちから完全に分離して，蜂起を計画したことが蜂起失敗の主要な原因であることが確認できよう。3月6日，ハルピン将軍は自分の指揮するフィニアンの部隊を捜し求めた。一方，タラ・ヒルズに集合した各サークルのセンターは蜂起計画の詳細を知らされておらず，タラ・ヒルズに集合した部隊も，彼らを統率するリーダーをもたぬまま取り残された。

VI おわりに

これまでの研究では，警察バラックへの攻撃がフィニアンのダブリン蜂起の中心に位置づけられ

てきた。しかし，本稿が明らかにしたように，警察バラックへの攻撃は蜂起全体の一部分に過ぎず，蜂起はより複雑なものであった。タラの警察バラックにおける敗退をフィニアンの蜂起失敗の原因とみなすデヴォイの記述は，フィニアン指導者の無能力を隠すためのいい逃れにすぎなかったと結論づけられよう。

最後に，本稿の研究上の位置づけを行う。従来のフィニアン史研究においては，ダブリンを含めてフィニアンの蜂起が詳細に分析することなく，フィニアン指導者の記述が大幅に受け入れられてきた。その結果，組織のもつ軍事的性格が過小評価され，他方で，その道徳・精神的側面のみが強調されるようになった。このことは，19世紀アイルランド史の一般的テキストである F. S. L. Lyons, *Ireland since the Famine* (London, 1973) のつぎの記述のなかに読みとることができる。

「武装蜂起を主張することで，フィニアン運動は，自由は戦うことにより獲得されねばならないという，古い厳格な格言を，その当時の世代に繰り返し述べた。そして，フィニアンは，希望のない状況において団結と勇敢さを示すことによって，自国のために自己を犠牲にすることは，人の望む最善のことだという，燃える炎のような教訓を後の世代に残した。[(74)]」

しかし，ダブリン蜂起の経過を詳細に記述・分析することによって，フィニアンの組織の軍事的性格は過小評価されてはならないばかりか，数千名を蜂起に動員できたというようにフィニアン運動は大きな組織力をもっていたことが明らかとなった。なお，フィニアンがどのように武器を調達したのか，どの程度軍事的訓練を行っていたのか，イギリス軍におけるフィニアンの組織は蜂起に際してどのような状態にあったのか，などについては，紙面の制限上述べることができなかった。これらについては，後日あらためて論ずることとしたい。

（慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程）

注 (74) F. S. L. Lyons, *Ireland since the Famine* (London, 1973), p. 138.